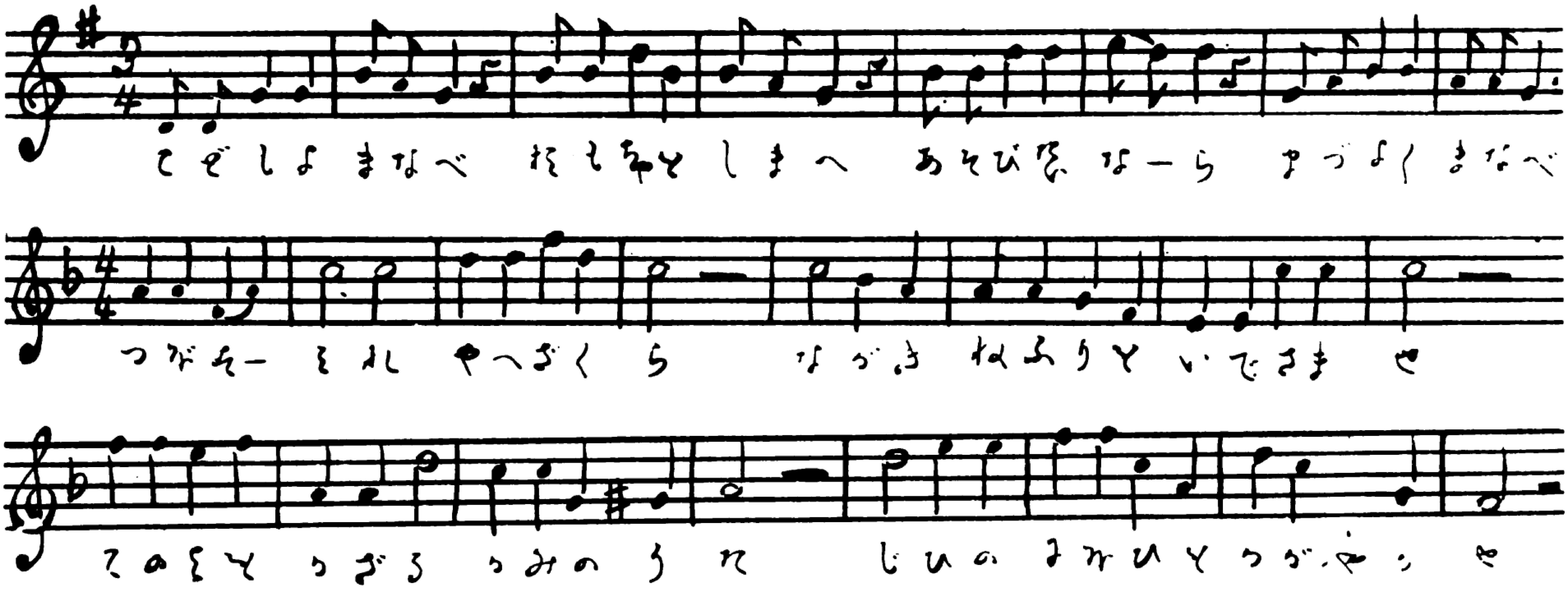
いらつめ

第十八九

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY



遞信省認可

いらつめ第四十八號目次（明治廿三年四月十日）

●文藝美術…五社百詠……………俊　成　編

○桃花（韻文及び文章十六總篇）……三坂きぬ‖松尾ひさ‖伊藤けい‖高木さらきぬ‖目時きぬ‖雪の國主人‖堀内なみえ‖藤元あさ‖三坂きぬ

○春月（文章總九篇）中村はな‖三坂きぬ‖翠亭‖奥野やす‖撫箏女史‖小向君子‖芦野‖伊東けい‖春江女史

廣告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二十九錢郵税共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵税共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵税共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵税共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六十五錢郵税共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵税共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府内に限り無郵税●每月四回（九日十日二十四日廿五日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局さある處に（神田郵便局）さ記し、受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）さ御記入の事●郵券代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り增しなれば妨げ無い事●見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上げます●廣告料一行金八錢、割引無し

從第四十八號至第五十七號十部版權所有

明治二十三年四月九日印刷
明治二十三年四月十日出版

發行人　山田武太郎
東京市神田區平永町九番地居住

印刷人　山本鉞之進
本郷區駒込西片町十番地

發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

本號には桃花を題にして各淑女君子の文韻文春月を題にした各淑女君子の文章立花家氏の脚本などが有ります

いらつめ第四十八號

家政

五社百詠(つゞき)　　俊成卿

○初冬

時雨とも神無つきとは誰がいひしあまてるひかり限あらしを

かくてこそは秋もしぐれし空なれど今朝は嵐のはげしかるらん

山里はかけひの沼のつらゝゐてをとづれぬるぞ冬をしかける

冬くれば霜おけとてや山かつのそのはをつきて庭となすらん

秋のゝら猶そこゝろの殘りけるあらしの音の今朝もかなしき

○時雨

夕つく夜かたふく空の村しぐれひかりよりちる露かとぞ思ふ

ながむればこゝろさへこそあくかるれ時雨る比のむら雲の空

むらくもの外山の嶺にかゝるより麓のさとはしぐれてぞ行く

うち時雨ひとの袖をもぬらすかな空もや秋のくれをこふらん

をのかやかて染し紅葉のちる時はをなしこゑにぞ又時雨ふる

○霜

あはれにも露とみしかと霜といひて冬のしるしと結び置らん

月のすむみたらし河の橋の霜たましけるともみえわたるかな

今朝みれば日のくま河はうす氷てさゝ河原はしもをきてけり

初霜は降にけらしなか鳥いなのさゝはらいろかはるまで

霜さゆるかれ野の尾花〇〇〇〇〇そのすがたまでしはれ過けん

○霰

山颪にたくひて夜半に降くるはあられは峰の物にや有らん

時雨せし雲のけしきは同しくてそらさへつるは霰なりけり

霜の上にあられ降よの冬の月われはそみける身とはいとはし

つきもすむ玉つくり江は霰ふり氷みづる名にこそありけれ

麓には又しぐるとやおもふらん深山のさとはあられふるなり

○雪

濱ゆふもいくへか下に成ぬらん雪ふりしけるみくまのゝうら

冬はこれ水のこゝちの空にみちて氷れは雪の降るにぞ有ける

いつくかは雪の朝のおろかなる猶かぎりなしみよしのゝやま

空さむみ雲さえ〴〵てふる雪は冬のすがたをみするなりけり

くもゝふかし雪の深山や是ならん御法の末も絶しとおもへは

○寒蘆

しはかぜのいせの濱荻うらかれて草のまくらも霜ぞさえける

冬の池の蘆のかれ葉の〇こそをはのうきそのたよりなりける

わきたにもなからのはしの渡にはかれ葉の蘆ぞかたみ成ける

なには江や入江の蘆は霜かれて月のやどりぞくもらざりける

なにはがたあしのかれ葉を風さえて汀のたつも霜をなくなり

○千鳥
伊勢のうみきよき渚に鳴く千鳥こゑもさえたるありあけの空
河千鳥なれもや物はうれはしきたゝすのもりに行かへりなく
月きよみせこに氷やむすふらんさその河原にちどりなくなり
明石がた月のてしはやみちぬらん須磨の浪路に千鳥とわたる
ことわりやまのゝ入江に鳴く千鳥浦風さむきありあけのそら

○氷
冬なれば水の氷いつねあれどことにはそはのわたりをそきく
きふね河岩こそ浪もこほりぬて冬ぞしづかにつきはすみける
やまとちやこま打わたすやまかはのこほりふみ分通しをわか
冬の池にやどれる月のひかりよりやがて氷はむすふなりけり
かつ氷かつはくだくる山かはの岩まにむせふあかつきのこゑ
此をいりの歌は新古今集にも出てゐます

○水鳥
夜もすがらをしの上毛とはらふにそ霜は誠にふるものときく
小屋の池のあしの枯葉の八重ふきや友ねのをしの住家成らん
浪の上に消ぬ雪かとみにつるはむれて浮べるかもめなりけり
いらひあへぬ上げの霜にいかにしてをしの青羽の○○○○○
最後の一首不足です

文藝美術

第十三回懸賞文藝應募得點

題　桃の花（前號つゞき）

○唱歌　（り）　三　坂　き　ぬ（十六）
霞てとばりに　色にそいせて　粧ひたてる　桃の花ひめ、い
ひてよわれを　わがおもふ人と　櫻をよそに　めでゝとひ来
一………

（ヌ）　松　尾　ひ　さ（十六）
いざもろともに　桃の花さく　うれしの春に　あひしとも
にはふこずゑの紅を　かざしにさして　いざもろともに　わ
がれは君の　三千歳とはき　御代をしいはゝむ。

（ル）　伊　藤　け　い（十二）
梅はきのふの雪ときえ　櫻はまだき、庭の面に　わがとき来
ぬともゝの花　春のにしきと咲にけり。
三千歳のよいひをのぶる桃さきぬ　折りてさゝげむ君千代ま
せと。
園生の桃の花さきぬ。　いざもろともあたちいでゝ　花のこ
かげにあそばまし、夜半のあらしのふかぬまに。

（ヲ）　同　上（十二）

明日ありとおもふ心のあだ櫻 さくらのみかは昨日けふ 紅にほふもゝの花、よはのあらしのふかぬ間に 行きて見ばやとたゞひとり 山ふところのわが宿を たち出て見れば春霞たなびく四方の山のべに いまをさかりの白桃の しろきはわきてきよげなり。 猶おくふかくたどらむと つゞらをりなる山道を のぼりつおりつ行きければ 足の疲をおぼえつゝ しばしやすらふ右手の方 遥かに見ゆる遠方の 霞のひまの桃の園 夕日かげそふ其の様は 錦おらそふ宮城野の秋のけしきもいかでかは 盡きぬながめも西山に 中ば入りぬし天つ日の 影ぞ歸りを促され、殘りをしくもおのがしゞねぐらにかへるもゝ鳥と 道ひきかへて歸りきつ まだ見ぬ友につげばやと 拙なき筆にかくは物しつ。

右評 「霞のひまの桃の園」、この桃が前の句の桃とかちあひ少し面白くありません

右一部

（ワ）　高木とら子(ヤシダ)

一 野邊はうこともわかぬ迄 千本のもゝは ほころびぬ。
心すみける春の日に いざや行きみんこのもとに。

右評 この本にハ木下蔭と直したらどうです。

二 木々にやどれるもゝ鳥も 彌生の空にあくがるゝ。
われも盛りのもゝの花 いざや手折りて遊ばなん。

三 花田色なそれは空に 千歳をちぎりさくもゝの
花はながめの一のとも、 いざやあそばん春の日を。

右評 第二の曲は非常の秀作です。 うのつぎが第一の曲、第三のは拙です。

（カ）　目時きぬ子(ナイゴ)

彌生の空のうらゝかに 色香もふかく咲きにほふ
桃のさかづきいくめぐり めぐれど盡きぬ樂しさに
もろこしびともこの花を めでにしこととも思ひ出て
げに面白やはなのゑの いゝよゝいゝいゝいゝい
もゝ代もよはひかさぬらん。
いとうらわかき乙女らは ひなのあそびの折もよし
打ちつどひぬる桃の園、 花をかざせるはなのおも、
そのよそほひのゆかしさは いづれハ花か、乙女等か。
ひく琴の音にれのづから もゝ鳥さへもうたふなり。
あゝ面白のもゝの園、 げに面白のもゝの園。

つれぶし

右三等賞

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

追加　（ロ）　雪の園主人（ヰナブ）

春たけてそらものどけく、咲き出しそのふの桃に
朝かぜみいろもくれなゐ、夕風も香ににほふなり。
あゝ天眞はるのおもかげ、あゝ美妙天女のかつら。
玉臺にけふりもゆかし、たきしむる空だきの香に。
柴のとにかよふまつ風、つま琴は妹がしらべか。
あけはなにいざけふばかり、かけひ水ハ時をきざむ。
物かはり星うつり行きて人ハ去り花はちりなむ。
玄都觀いまはあとなし、劉郎が詩のみぞのこる。
武陵源それも夢なり、秦の民いづくにかある。
知るや世は寇風賊雨、朝の榮ゆふべに消えむ。

右二等賞

○文章

（イ）　堀内浪枝（イセ）

春―春とさへ言へば何となく心が長閑になるが不思議です。そも春の心のどかになり、氣のうらゝかになるは何が原因でしやう？　春風に谷の氷の解けて、打ち出づる浪の花と見ゆるのでしやうか？、一刻千金とも賞めました朧に霞む月の影でしやうか？、雪の消えた山々に立罩めて、花まつ人の心にかゝる霞の袖でしやうか？………是らも美妙な靈妙な春の天地を造る分子には相違ありません。　が、………決して氷の解けた川水、朧の月、山の霞に靈妙な春の天地は造られません。「世の中に絶えて櫻のなかりせば」と古人もいひました。眞にさうです。……が……夫は櫻にのみ傾いた說……櫻には限りません。　天然の花籠の櫻に種々樣々の花に全く春の天地を作たのです。

魁け顏に咲た梅も已に散つてしまひ、まだ櫻の咲くには早い………此間の淋しい、みすぼらしい時に花を開いて、寵を專にするは桃の花でしやう。「下司の子の僅に化粧し……着飾りたる如し」と許六はいひました。が……夫は餘り殘酷な詞……氷姿淸骨の梅や艶麗濃色の櫻にくらべたら無論其花の劣るハ當然です。梅ハ花の魁といひ、櫻は花の王といひますから……決して無理ではありません。　牛を桃園の南に放つと詩にもうたはれ、又三國の世に花の蔭で義を結んだ古事もあります。　薄紅に咲揃ふ花の盛りは丁度酒に醉た美人の顏……夫れにも勝る樣です。　朴訥の豐太閤に迄愛されて、長く伏見に名を止めましたも美しい花、芳ばしき香のあ

りましたからでしやう。况して百花の共進會の樣な春の中頃、梅が散つて櫻に早く、美妙な春を代表するものがありません。　其の淋しい、みすぼらしい時に咲いて、春の美妙なのを失ひませんは春の神樣への忠義物ではありますまいか。殊更私は春殊に桃を見ると、なつかしさ…慕しさがまします。思ひ出せば五年前、まだ女學校にあつた時、兄弟の樣に親しう交つた朋友が二人ありました。　校中でも余り三人は中がよすぎて、外の朋友から憎まれる位、夫れは〳〵骨肉の中かよりも親しい交りでした。　ある日運動場で……忘れもせぬ丁度桃のさかり、其花の蔭で三人が集つて、姉妹一約を結びました……その時の嬉しさ……欣しさ、未だに忘られませんが……嬉しさの心がまだ靜まらん內……あら無殘！丁度約束した三日目に……其內で一番年の上な朋友が腦充血で僅か二日の病ひ、未だ運動場の桃の散らぬ內、無常の風に誘はれました。　其時の悲しさ、あぢきなさはどの位でありましたでしやう。…今更思ふも涙の種です。　夫れゆゑ私は桃の盛になると、…花の木蔭に遊んで學校の運動場……互に見合た嬉しさうな顏……未だ胸中をはなれません。…かういふ譯ですから、花の中でも一番桃が慕はれるやうです

右無賞

（ロ）　　藤元あさ（ヒカ）

日かげ長閑けき春の空汀うつ波の聲も靜かな池塘の上に紅ぬ匂ふ桃の花まてと笑を含める乙女の風情。　無限の優美—霞に閃く其錦の衣。　無限の艶麗—風に飄へる其綾の裙。あゝ姑射美人の梅歸り花王の櫻未だ來らぬ天地に床しく匂ふ此桃の花思へば念へば昔劉郎の戀ひ訪ふたも無理ではありません。

小倉山みねの紅葉ばてゝろあらば今一度の御幸またなん。

桃の花—乙女の桃の花—いまが見どきです。　で、心あらば物いはぬながらも劉郎の再來を俟つて居る事でしやう。

右いらつめ一部

（ハ）　　三坂きぬ（ヒカ）

（李）凡……俗李ですと—今向ふへ行つた人の言葉。　定めし御聞きで御座いましてしやう。　あゝ何故わたしは此樣な氣襯乏しい姿に生れて來たのでしやうか。　悔しくてなりませんよ。

（桃）御同樣です。　しかしいくら念つたとて詮のないことゝ悟れば—いや悟らずとも自分を守つて、人の兎角に批評の此

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「吹く空の風、」と笑ふて居るより他無い次第では御座いませんか。

(李)でもあの梅さんなり櫻さんなりまア御覧なさいませ。野面山邊「春は我世」とのやうな顔をして……神様も聞えぬわざ……

(桃)その様な罪深いことをおツしやるものでは御座いません。神様のなされた階段のそれ〴〵及ばぬ處はさて及ばぬとしてそれでよいと安心するものです。　又世の中はあの様な人のみに限りませんのですもの。　現にし及ばぬ色姿とは云へしわたし達を愛でらるゝ人のためにハ下に新らしく一條の蹊が出來た位では御座いませんか。　で、凡といふとも俗と云はうともそれは心々に任せてお置きなさいませ。オヤまた〴〵とおもつて居ましたに早日が暮れましたよ。　「燭を滅すれば萬婦皆同じ」とか色のあやめは誰彼分らぬやうになッて仕舞ひました。

右三等賞

花兄弟二枝梅香(序幕續)　　立花家蕭

吉　いや飛んだ惡い奴だ。お嬢樣どこもお怪我はムりませぬか。　此時梅子は前に出でうれしき仕打にて、

嬢　貴方樣がお出にあり、危い難儀を免れまして難有うムります。

香　丁度能い所へ兄きが來て結構でムいましたねェ。

嬢　不圖難儀をお助け被下なんとお禮を申さうやら、—難有うムりまそ

山　私もどうなることと心配を致しましたに、親分樣のお蔭にてお嬢樣にお怪我もはんにうれしイことでムんすわいなア。
　ト二人は禮を云ふ。

吉　これはしたり彼樣者は散々に懲してやるのが世間の爲め。其のお禮でかへつて痛み入り升そわい。

嬢　又改めて浪花町の御宅までお禮に上るでムりましやう。

香　れつと〳〵そんなとは。女は貴兄の大禁物。

梅　でもムりませうが。○ト顔を上げ梅吉と見合せる梅吉は一寸仕打、能い女だとぞつとせし仕打にて始終見取れる。

吉　其のお禮には及びませぬ。○とちッと思入れ。此時々々の鐘かなる。

香　ありやアもう一夕暮お娘さん明るいうちにお歸りなせい。

梅　左樣なればお免下されませ。○ト梅子は一同に禮を述べ、花路に行きかゝる。

吉　やもし〱〇ト心殘りの思入れ。

梅　なんぞお用でムり升するか。〇ト本舞臺に來かゝる。梅吉は恥かしき仕打にて、

吉　氣をつけてお出なされ。〇ト思切て云ふ。

梅　難有う存じます。〇ト辭儀をする。唄になり梅子ハ向へ這入る跡梅吉は殘り惜しき仕打にて始終見送て居る。香太は梅子の落して行つた銀の簪を拾ひ。

香　もし親分こんな簪が落てゐました。〇ト云へど梅吉は側目もならず向を見詰めて居る。香太とお山は顔見合せさてはと云ふ思入れ。

山　女嫌と評番の親分樣が此の有樣。

香　已れにもどうも。〇ト二人は不審の思入れ。

れい兄貴と　〇ト大きく言ふ。是にて梅吉はびつくり二人と顔見合せ、一寸思入れ。香太の差出す簪をひつたくるを道具の替りの知らせ。二人はあつけに取られし仕打。梅吉は簪をぢつと見詰めはれ〱せし思入れ、此見得宜しく時の鐘の送り雙盤の責めにて道具廻る。」

本舞臺四間常足の二重庇付まハり椽側二重上手一間の障子屋体上の方一間の床の間好の掛物續いて地袋戸棚三尺瓦燈口大鼓の張の總腰張の茶壁御影石の踏段上下建仁寺垣にて見切り所々に梅の立木何もの所枝折戸四ツ目垣石燈籠此後口黒塀日覆より梅の釣枝都て月瀨座敷庭前の摸樣宜しく妓に白妙切り下げ白髪かつら老けたる拵にも座蒲團に座り火鉢に當りながら本を讀んで住ひ後に以前の梅に肩をもんで居る此見得本釣鐘の送り幽めて琴唄にて道具止る合方シンミリとなる

妙　これからもう獨で參詣はやめたがよいぞや。しかし怪我がなうて安心しました。

梅　危い所を御助け下さつたは今江戸中に名の高い浪花の梅吉と被仰る方、御年は漸く廿五六のやうなれど劍術は中々に武士も及ばぬ御腕前、二人の者を散々に取つて押さへた有樣は丁度芝居の樣でムりました。

妙　これと云ふも日頃より和女の信ずる觀音樣の御利益ならんそれにつけ今の話で思ひ出すは先年亡き夫左膳殿が破門をした彼の大作少さい時より家におき丹精させた甲斐もなく身持の惡い其上に和女に向ひ無体の戀慕。左膳殿が度々の強意見さへ糠に釘遂に放逐なされたが惡い奴でも弟子は弟子。雪の朝や雨の夜は何處に如何して居ることと案じらるゝも老の癖。夫に引替へ婿の春雄夫の目鏡に露違ず御上の御覺えいと目出度く和女と二人で孝行を盡くして呉れるを艸場の蔭でさぞや夫が悦こびませう。

トとほろりと思入れ。

梅　心柄とは云ひながら近頃世間の風評には彼れもいたく零落れ果、謡を唄ふて門に立ち一錢二錢の合力に露の命をつなぐとやら不憫なことでムりまする。〇ト涙を拭ひ。只今の樣に母樣がお案し遊すお思召を風のたよりに聽いたやら大作とて武士の息子、必ず心を入れ替て眞人間になりましやう。

妙 いや〳〵小人窮すれば亂るとやら。生來能らぬ彼の大作斷取り强盜は武士の常と非道な事でも爲やせぬかと妾は夫れが案じられます。

梅 左樣な末まで御心配遊されては返てお身の毒なればもう御心配遊しますな。

妙 ほんに和女の言やる通りもう心配を爲ますまい。夫れはさうと春雄殿歸りの晩いは殿樣と好る道の圍碁のお相手。今宵は定めて夜を深かせばお酒の仕度をとゝのへて着替の衣服は炬燵にかけ、よう温めておいて下され。

梅 難有いお思召常に申しつけましやう。

妙 和女と云ひ婿殿と云ひ世にも稀なる柔さしい孝養、明日の日妾が目を眠とも心懸は更になく笑て成佛いたしまする。

梅 これはしたり母樣何言はしやんす。夫と共にお側にて幾百年もお孝行盡さにやならぬ二人の役必ず共に其のやうな延喜でも無いお言葉はもう被仰て下さいますな。

妙 おゝ柔さしい言葉を聽くにつけ長生きしたいは山々なれどあすをも知ぬ老の身は最早六十路を越の雪やがて消え行く

梅 えイ

妙 春風ぢやなア。ぢつと仕打。

梅 えまたしても〳〵心細いと被仰つて私を泣かせる氣かえなア○ト愁の仕打

妙 夫りやさほどまで此母の死ぬのが和女悲しいか

梅 悲しうなうてなんとしませう。母さん私や悲しうなりました。

ト……ト泣き落す。白妙は泣き伏す梅子の背を撫で、

妙 おゝ私としたことが益ないことを云ひ出して和女を泣かせて濟みませぬ。これと云ふも年寄の愚痴惡いことを云ひました。何卒機嫌を直して下されば…もう〳〵決して云ひませぬ。

梅 夫りやもう云ふてもようはムりますが。

妙 なんで云つて能いものか。

梅 夫れで私は安心しました。○トうれしき仕打にて袖口に涙を拭ふ。白妙は之を見てぢッと思入あつて、

妙 何歳になつても母を慕ふはほんに和女は。

ト梅子の鬢の毛のもつれを手の先で揚げながら、

赤子さんぢやなア。

ト雙方顏見合せてにつこり思入れ。此時瓦燈口よりお常島田かつら前垂掛け下女にて出で來り、

常 お嬢樣に申し上げます。只今御家老樣の御邸からお使にて今晩は琴の催があれば是非お嬢樣に被入るやうとお仲間が待つて居ります。

梅 夫れでも夫が留守なれば。

妙 いや折角のお迎ひ故一寸伺つたがよいわい。

梅　左様なればお言葉に随ひ、暫時御免を蒙ります。○ト お常に向ひ。旦那様は多分晩いお歸り故お酒の仕度を賴みます。

常　かしこまりました。

梅　そんなら母様一寸行て參じます。○ト 合方になり梅子はお常と共に奥へ這入る跡白妙は見送つて。

妙　あ持つべき者は小寶ぢやなア。○ト 心うれしき思入れ。本釣鐘風の音を幽めて、梅枝に鶯啼く。てもしはらしい彼の初音。○ト 又鶯笛になる。白妙は庭下駄を履下にれり、あちこち歩きながら鳴音にききとれる仕打。此うち始終鶯笛をあしらひ白妙は歌を考ることなど宜しくある。本釣鐘風の音になり下手建仁寺垣の蔭より難波大作好の拵へ覆面尻端折にて刀を抜き窺ひ出て來り白妙の油斷を見濟まし後より一刀斬り下げる。これにてあッと倒れるを直に乘り掛つて止をさす。白妙は苦みながら本釣鐘にて落ち入る。大作は旨く行つたと云ふ思入にて刀を携げて障子屋体に這入り直に跳ひ傳書の一巻を持ち出來る此時瓦燈口より出逢頭にお常出來り。

常　やアお前は。○ト びつくり仕打。

大　それ知られては○ト 一刀にお常を斬り倒し、大作は一巻を戴いてにつこり思入れ。下手に人音するこれにてびつくり行燈を吹き消し一巻を懷にして石燈籠の蔭に忍ぶ。下手より月瀨春雄羽織袴大小にて出來り枝折戸を開け。

春　母上只今戻りました○お梅く今戻つた。こりや燈も消えて。

ト 二重の方へ行き掛けて白妙の死骸につまづき。

やゝ○ト 吃驚よろける所を大作は一刀あびせる。

あゝ何者なるか聲をも掛けず卑怯な振舞。

大　れゝ誰でもない難波大作だ。

春　巳れ思知らずの人非人。傷は負ひたれど汝等ごときに。○ト 苦痛の仕打にて刀を拔いて切て掛る。大作は突き飛し又一刀斬り下げ二重にて刀を振り上げきつと見得本釣鐘凄みの合方大作は刀を引いてぢつと下を見込む。春雄は歯を食ひしばり口惜き思入れにてどッとなり肩を押えて苦痛の仕打本釣鐘風の音鶯笛にて道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺正面黒の板塀見越の松能き所々用水桶下手はすお邸續の裏窓を見せたる書割り都て月瀨家裏手摸樣宜しく風の音にて道具止ると板塀内より以前の大作松の樹を越えて用水桶を足場お舞臺に飛び下りる所時向より梅子仲間に提灯を持たせ急ぎ足に出來る

伴　もうし御孃樣何故そんなに御急きでムります。

梅　先程よりけしからぬ胸騒ぎどうぞ急いで下さりませ。○ト 本舞臺に來る大作は南無三と云ふ思入れにて塀に添ひ、すれ違つて花路附際に行く梅子は不審の仕打。中間は提灯を向へむける。

正しく曲者。これにて大作はびつくり下に居て礫をうつ。梅子は身を替す提灯にばつたり當り火消える仲間はびつくり尻餅を搗くを木の頭大作は起上つて一散に逃げて這入る。梅子は之を見込む。此見得宜しく風の音にて拍子幕。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

二幕目
場割○宇都宮武藏樓表の場○同しく座敷の場○同しく離座敷の場
役割○敷島八重造○藝者小芳○同小雪○同花助○同月太○武藏樓女房お浪○浪花梅吉○子分香太○此花家抱梅吉實ハ月瀨梅子○武藏樓女お筆○同おすみ○敷島子分四人
本舞臺一面の平舞臺上へ寄せて風雅なる門こゝに即席御料理武藏樓と云ふ聯を掛け左右船板の塀松飾り注連繩正月の飾宜しく舞臺能き所へ床几を据ゑ都て武藏樓表掛りの体此に敷島の小分二人酒に醉ひたる仕打にて床几に腰を掛けて居る此摸樣宜しく通神樂鳥追の三味線にて賑かに幕開く
△あゝ醉つた〳〵今朝からたゞ酒びたし流石の己れも閉口〳〵。
○玆にかうして風ふふかれ年始に廻る藝者衆の顏を見るのも又一興あれ〳〵大部通るやうだ。
△手前は女を見ると目がねェなア。
○手前も矢張り同しことだ。藝者と云へば此頃はどう云ふ譯か親分は小芳をすつかり呼ばねェなア。
△夫りや當然よ
○どう云ふ譯か聽かして呉れ。
△手前もよつぽど野暮な奴だ○親分は此節は去年の暮に弘めをした此花屋の梅吉に大熱々の首つ丈け、夫で小芳を見捨たのよ。
○己りや久しく仙代に行て居たから知らねェのさア。親分が惚れる位な女なら梅吉と云ふ藝者はすてきな別品だらうなア。
△別品も別品小野小町か衣通姫靜御前か佛御前。
○牛の御前か三回か
△えゝ交ぜかへすな女が能くつて温しくれまけに江戸の生れ故足の先から頭まで五分もすかねい仇姿今下野で名の高い飛鳥落す親分の熱くなるのも無理はねェわな。
○成程さう云ふ譯なればいづれ其うち落籍せた上姉御と言はせるつもりだらう。
△もう其の相談になつて居るのさ親分が美男故うつりが能つて巳れ達までなんだか鼻が高いやうだ。夫に引替へ彼の小芳、姉さん株を鼻に掛け餘り生意氣すぎた故見替へられたも自業自得。
○道理で先つき女中の話に小芳はなんでも中國筋の今當地に居る武士と大層深間になつた樣子隨分浮氣な女だなア○門の内よりお筆おすみ島田かつら前垂掛け茶屋の女中にて出て來る。
筆 もし〳〵御二人さん親分さんが早く來いと被仰ました。
す 最前より御待兼さア〳〵早く御出なさい。
○てもせはしない今行きますと云つて下せい。
△又親分に飮まされるか。
○否ならよしにするが宜い。
△なアに御馳走酒は大好よハヽヽヽ
す筆 どうぞ直に御出なさい。○ト二人は門の内に這入る

兩人 どりや御馳走にならうかい。○ト床几を離れると通神樂になり上手より前幕の香太脚半草鞋旅裝にて出で來り、不思ず二人ゟ突き當る。

香 これは飛んだ失禮をいたしました。道を急ぎまーた故眞平御免下さいまし。○ト行き掛けるを二人は止め。

○ やい若いの汝は目でも見えねエのか。

香 へヱソい心が急ましした故どうぞ御免なすつて下さいまし。

△ いや勘辨ならねエ盲按摩ぢや有るめいし大道廣き往來で眞晝日中突き當るはは ミア手前は「スリ」か胡麻の蠅。兄貴懷中に氣をつけねエ。

これにて香太は立腹の仕打にて、

香 ヤイ唐變木奴何を拔かしやアがる。乍憚江戶見だ汝等のやうな百姓は巳の相手にや不足だが賣る喧嘩なら買てやる。

トはだを脫ぎきッと思入れ。

兩人 やかまーいたゝき伏せろ。

ト兩人は一度に撃て掛る。二人を相手に摑合の立廻宜しくある誂ひの端唄になり下手より此花家梅吉實は月瀨梅子藝者姿好の拵にて出で來り直に中に這入り。

樣 まゝゝ待つて下さんせ。○ト二人を引別け、又しても小分の衆親分樣ゟ言告けますぞ。

○ やアこれは姉さん飛んだ所を○と恐れ入ッたる仕打△の袖を引張て謝れと云思入れ。

△ 酔つて居た故江戶の若衆どうぞ勘辨して下せい。

兩人 これ此通り拜みます。○ト二人は親分に言れては大變と云ふ思入れにて香太に詫をしながら梅吉を拜む。梅吉は思入れあつて。

梅 もし江戶の御方とやら彼の通り謝ますれば私に免じどうぞ許してやつて下さいまし。○ト梅吉は丁寧に捨臺詞にて香太に詫る。

香 私も道を急きますからそんなら貴女に免じこれで御別を致します。○トはだを入れる。

梅 どこぞ御怪我はムりませんかことに御二人の衆ちと愼んだが宜うムんす。

香 難有ムります別に怪我はムりません。○と梅吉を見てどこかで見たと云ふ思入あつて足早に向に這入る。跡梅吉ハ見送つて矢張り何處かで見たと云ふ思入れ。

梅 江戶の御方と云ひゐがらても氣輕な人ぢやなア。○と感心の仕打。

○ もし姉さんどうぞ親分に内々にして下さいまし。

△ 梅吉大明神樣二人を助けると思つてどうぞ此場ハ此限に。

樣 見免ーてと御云ひだらうが私ャ否だよ。これから親分の御座敷で殘らず話さゐやなりませぬ。

兩人 やれ〳〵情けない。

樣 常日頃から亂暴は必ずするなと親分の被仰たのを御忘れかえ。

○ 決ーて忘れはしませんが醉つたまぎれの出來心。

△ これからきつと愼みますれば。

兩人 何卒許るして下さいまし。〇ト色々に詫る梅吉は可笑さを堪へること宜しく有つて、

梅 許るしにくいことなれど今日はだまつて居り升う。

兩人 やれ〳〵夫で大安心すんでのこと正月早々大目玉を食ふところ。

梅 御二人共に是柄はもう大人敷うしたが能ふムんす。

兩人 これに懲りて二人共もう亂暴は致しません。

梅 それはさうと親分樣が御待ち兼、皆樣一所に參り升う。

兩人 うんなら姉さん。今のことは必とも。

梅 ほゝ、、疑ひ深いも程がある。其の御念には及びませぬ。

〇流石は江戸の生れ丈け氣性と云ひ器量と云ひ、

△宇都宮には惜い者

兩人 野州切ッての親分が血道を上げて惚れるのも、

梅 にエ

兩人 なアにさぞ親分が待て居ましやう。

梅 餘まり油を〇と二人の肩をちよいとたゝくを道具替りの知らせ〇お掛けでないよ。

此見得宜しく幕開きの鳴物にさわぎ唄を冠せ、道具廻る。

第十四回懸賞文藝應募得點

〇文章　題　春月

（イ）　中村花子（イセ）

昨日まで寒き（い）冬空に凄く冴えて霜の上に光をさし添へて居た月、今はかよわき（い）櫻の枝に懸り（ッ）て、錦なす花の俤を隈なく照して居ます。其月の愛想にか笑を含む花、〇〇〇〇〇〇〇定めて夜もすがら夢を夜びますまい。庭は躊躇する程一めんの花の影、其愛らしい花影と共に清き（い）池に浴してをる（ねる）月の風情、誠に愛らしくそして清らかです。あら、無殘し一ぢんの風、この月花の睦ましさを妬み（ん）てか無情にも時ならぬ白雪を散らしました。それさへあるに時を得顏の黒雲、その片割れ、月の表を覆ふ無粋……やがて月は戀しさうに覗く花の顏、花はそれに耻ちてか薄紅の唇がをのゝいて居ます。されどそれも亦一しほの眺めです。實に愛らしきは春の夜の月であります。まア同じ月、そして冬空の凄さ、春の夜の愛らしさ、只見る時節の違ひ。しかし思ひまはせば富貴の樂み貧苦の涙、それも其時の境遇です。昨日の淺瀬は今日の淵、移りかはりは世間の常、てもわぢきなき（い）浮世であります。

右評　「あら無殘から春の夜の月であります」までが拙でした。

（ロ）　羽富翠亭（シズ）

春の月―いつも朧がちな。ひきそめた霞の爲にむなしく其粧はつゝまれて、おぼつかなくも大空をたどる有樣……得も云

はれぬ趣ハありまそ。が、あの秋の月の隈なく照る光り、玉より白い顔にくらべて其れとりまさりはどうでしやう？あれも月、これも又月、同じ月であり作らかうも違ふ物でしやうか？　あゝ思へば月ばかりではありません、人の身の上もまた。が、秋の月の清いのも春の月の朧なのも其もとをたゞせば只蔽ひかくそさまたけがあるとないの界です。恐るべきはさまたげ、邪魔物。

この世の中に生れ來ました(來た)われ人共に貫きたいは志ざした目的です。が、學術まれ一枚藝まれ千辛萬苦も堪へ忍んでさまたげにも撓まず邪魔にも屈せず志ざした目的を遂げ得て、光り限ない秋の月の輝きと同じ樣に限りない愉快を心に覺ゆる人は兎角すくなく、どうもかの邪魔のためにに打勝たれて志ざした目的も遂ぐるとが出來ず、はりつめた心もゆるみはてゝ、世に生れたかひもなくおぼつかなきたつきに一生を送るものが多いです。思へばなげかはしき限り…あれむべき極……噫、

右評　この世の中以下を殘らず削ッた方が遙に宜しいです。

（八）　奥野やす子（オホサカ）

春は花、秋は月、とはいへ春の月も亦一入の趣があります。今しも東山の低處へぽオッと差し初めた淡紅、次第に色を増す鏡の其れならで、何時しか靆く雲にセラリと打乘て笑まぬばかりの風情で、しとやかに昇りし桂の魂。皎々し冷艶しアラ不思議、今まで常娥の君が打乘りし雲と見てしは雲ならで盛に匂ふ山櫻、颯と吹き來る夕風にパラ〳〵と散る幾多の花瓣、其れが樹の下蔭に湛へた鏡の樣な池の面に一々接吻を與へる風情。ト見れば池の底には嫦娥の君、いくら其身が金烏公の射熱を受けて暑ければとてまだ此夕風の袷の素肌を冒して快くない彌生の空に早くも冷水浴とは……が、此一夜に、此一ッの場處に、花―水―風―月の四ッを併せての眺めは實に佳絶の境と思はれます。

以上（二）無賞

撫箏女史

春雨のいとしづけくふり出でゝ何となうねむけくおぼゆるほどに文机によりてしばしまどろみし折しも人の音つるゝこゑきこゆるまゝに妻戸たしあけ見出せば、にはに咲きにほふさくらの花ぬれ〳〵てしたゝるつゆもうすにでりせるかとうたがゐるゝほど、月のおぼろにかすみはてしさまのひとしほのどけくもまた珍らしきに

光をばしたゝるつゆにゆづりきて
かすみはてにし春のよの月

とくちずさびつゝしばしよそごゝろなかりけるをりかなたの木かげにて打わらふこゑに心つけば親しきともふみ子の春月てふ題もて連歌詠まんとて訪ハれしなりけり。

（水）　盧野潤三郎（イハシロ）

「朧月夜に……」と千里が詠みししくものもなき春夜、「花に有清香……」と坡仙が吟ぜし千金の價ある一刻花。ハ月に對してうれしさうな笑顔、月ハ花に向てやさしき(い)愛嬌、言ひ換へて花月相愛。此相愛の情即ち月下の景色は去年と少しも變りはありません。が、此花天月地に手を携て語つた人は

今いづこ。あゝ思へば早一と年の昔です。「佳人一別無消息」。其地位境遇は今いづこ其思想感情ハ今いづこ月と同じくおぼろです。

（へ）

春江女史（サカヒ）

「前略……心知り合ひの孃達五六人、今宵妾方の春錦園で花に照り添ふ月の下に樂器を弄びます。貴孃も何なりとお持ちなすつて來て下さいませ。時間は七時卅分からです。」宮川勝子孃から此書を貰つた時の嬉しさ、兄上の羽織、それを縫ふて居る心地もせず、まだ催さぬ音樂會の有樣却つてそれが早や胸に現はれて來ては暮合告ぐる鐘、之を聞いては△急ぐ心、禁へぬ情―用ある下婢に琴を持たせ、自ら濶歩と知りつゝも春錦園までまゐりました。が、まだ一人も……唯席を作つてゐる下男が忙しさうにして居る許り。

「貴孃余りお急ぎなそつたものですから」。

「だつて内の時計は七時三十分」。

「ホヽヽ、常から廿分余りも進んでゐますのは御存知で入らッしやるのに」。

併し今更專術もありません、歸る下婢に續いて下男も去りました。殘る吾身一人設けの席に就きました

園に滿つる山櫻―幾百本の山櫻―咲も殘らず散りも初めず「暖雪香雲春滿園」と詩人のうたふ頃、細かに吹く風は木の間を潜り、そして一二三―晝の名殘に鳴く鶯の聲を送つて來ます。靜けさ淸けさ……と思ふ折、見れば月、匂ふ霞を巳が薄絹の衣裳としてかすみながら「時」に千金の價を彩ッて居ました。ア丶此景色―それにまだお一人も……

つや〳〵したる青芝の上、描くは花の影、それが上を輕く蹈みながら小さな池の邊までが……景色亦一變、幾片の沈む珠の優しい閃めきハ小魚の戲れに亂されて、忽ちに圓、忽ちに方、余りの面白さに思はず石に腰かけ、月―優美な月―乙女の姿、床しい月―まこと天然の美、古も今も人の心を狂ハすも無理ではない、アノ優しい―水に映る姿、アノ美しい―花に照る樣、何故此樣に優美？併し萬物の顯象、思へば渾て心の反射。心の反射、それが萬物の顯象。心が凄愴であつたならば、萬物も渾て凄愴に見えるもの、心が快樂であつたならば、萬物も渾て快樂に見えるもの。今夜の月の優美に見ゆるのも約まる處月其物が優美でなく、心の作用それが優美。ア丶此天地の森羅萬象、心の反射！

「オヤ何を言つて居なさるの……ホヽ眞耳目で」。

「アラ忌やですよ。せんど人を待たせなすつてからに、勝子孃、併し皆さんもお出でなすつたの……さう……それでは席の方へ行きましやう。

花のかげ、月に向つて、琴、風琴、須磨琴、ヴハイオリン、

春の彌生の夕まぐれ、み渡す山邊は櫻にて
花かあらぬかしらくもに　月こそ朧ろに匂ふなれ。

右第三等賞

（ト）

伊東けい子

一刻の價千金といふ春の宵も烏羽玉の闇の夜であらうならばだれが千金。名殘をしさうに西山に入る日の後かげを眺め

て靜に山の端を放るゝ優美な月、此月があればこそ、春の夜の價も出るのです。緑まだ色淺い青柳の糸を動かすうよ風寒くなる彼方に遠い梢から香の通ひ來る椽先、月と花と今一ッものたらぬ心地。然し滿ればかはるならひ、此月にこのけしきをみて何不足。あら云てみれハ限のないもの。殊に今夜は能晴れて遠くまてはつきりと月夜は物を思ハすとハなぜ？否うれとてもみる人の心、月に罪は少しも。わら好月、夏秋の光も格別ですが梢に匂ふ白雲の上行春の此月もわゝいくらみてもみあきません。

「姉さん何して居らつしやるの。先刻かられ琴も出して待つてるあちつとも入らしやらないからどうなすつたかとれもつて」、

「あゝさう、すまなかつてね先刻つめを取りふきて、ね、ふつとれ椽へ出たら、れ月さまが余りきれいだからか、ヲ此間云つたいらつめの課題子あれを思ひ出して書てみたくなつたからつい忘れちまつて今まで作て居たの。見て下さいな。題にうりむいては居ないか知らん」。

（チ）　小向きみ子（ヒサカ）

月の詠めハ四季折々のけしきはあれともきて春のよの朧けなるにまされるものはあらじ。されはこそいにしへ人も「てりもせずくもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物ぞなき」とうそうたひはやしけれ。また世の少女たちのありさまぶ取ても立居ふるまひ物いひさまにいたるまであまりかしこきに過んよりハいうにやさしくいはゞ朧なる月影のあまりにひかりかゞやかねこそ奥ゆかしう有けれ。いにしむかし豐臣秀吉か行軍の折ある夜陣中を見廻りしに朧月夜といふ三文字を扁額にしたゝめかゝげ有しかば直に銀百枚を送られしとかや。こは後の世の設け事にはあるべけれど先にいへる朧月夜にしく物そなきてふ古歌の詞をかりて、敷物に事かけりといふかくしてとにそ有ける。そハ兎まれ角まれけにめつへきものははるの夜の月にこそあれ。

以上いらつめ一部

（リ）　三坂きぬ（ヒサカ）

しどけ無い姿し日頃人にハ見せることさへせぬ肌に自ら進んで嫩風を觸れさしつゝ、（サシッ、はサセナガヲ）花の庭—その花のすきまにこぼれ來る月を追ふて時の移るも知らず、ても美しいそして淸らかなあたら夜を唯花護る犬と計りで。犬も夜更け氣靜まッては花に却ッて已が夢を護らせます（マスはル）に、倘も愛でる心から影を傾むく西ぶ送ッてまで。あゝ……霞む夜の月—花の月、思へばれぼろの光を露匂ふ袖にとゞめる跡は同じでも待つ君のあるでは無く、うして此くまでの—あゝ＝我れてそまてと此月を味はふて居るのでしやう。

右第三等賞追加

流行追加！一樂の半襟

いらつめ第四十九號目次

●文藝美術…こぞの燕（韻文總十七册）‖撫箏女史‖菊のや露子‖伊東けい子‖奥野やす子‖松乃‖福富翠亭‖伊東けい子‖桂香小史‖三板きぬ‖松尾ひさ子‖雪の園主人‖春江女史

●雜　纂…流行

西陣たりちりめん‖西陣製郡唐ちりめん‖西陣製明石ちゞみ‖小紋ちりめん‖中形ちゞみ‖ネルちゞみ‖紅梅たり四ッ入‖佛國製水波琥珀婦人帶地　‖英國製縞セル單物地　‖英國製疋田小紋形るゐ‖獨逸製本フラネル

○瘭疽の預防

○家相方位の說

○花都玉手秘事

手の赤いのを治す法‖石鹼の用ゐ方‖火にあたる事　‖手を美麗にするくすり‖レモンの大効

●數　學…第四十七號解義‖新題

●通信問答

●餘　興

いらつめ第四十六號目次

●家　政…裁縫獨學び（第十三）……木下貞子○六尺を以て中だち股引裁縫法‖大巾フランネルのシャツの裁方‖並巾フラ〻ネルのシャツの裁方‖並巾を以て中裁小供袴裁方‖並巾の馬乘袴裁方‖袷袴の裏の裁方○女子の望み……さゝ子○土瓶鐵瓶の湯垢を去る簡法

●文藝美術…處女の愛情（和歌二十首、文章四篇）○桃花和歌歌曲○春興（韻文）……撫箏女史○世のさま（韻文）……掬月散史○星（譯韻文）……朧月○月瀨に梅を見る……笹川はる子

●寄　書…江湖の淑女諸君に望む……香圃女史○談話について……槐月陰史

●脚　本…花兄弟二枝梅香……立花家薫

いらつめ第四十七號目次

●苔　の　花…つさめの有る世（韻文）、命の綱、雨はふる〻（韻文）、かよわい物（綸入）、ゐなか娘（綸入韻文）

●數　學…トランプ遊戯法の數理……緣梅子、第四十五號諸學題解義、新題五種

●寄　書…談話について……槐月陰史、江湖の淑女諸君に望む……香圃女史

●雜　纂…花顏玉手秘事、漢字異譯同義、初夏に掛けての流行衣類、小名木川棉布製造會社の綿布、婦人演說行、狀成蹟表、以太利女子教育世界

廣告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二十九錢郵税共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵税共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵税共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵税共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六十五錢郵税共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵税共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府内に限り無郵税●毎月四回（九日十日二十四日廿五日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局（神田郵便局）と記し、受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事●郵劵代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り增しなれば妨げ無い事●見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上げます●廣告料一行金八錢、割引無し

本號には前號から引つゞきの懸賞韻文

こぞの燕●新流行

瘭疽の預防法

家相方位の說

花顏玉手秘事

其他種々な事が出て居ます

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第四十九號

文藝美術

第十五回懸賞文藝應募得點

題　こぞのつばめ

○唱歌

（イ）　村箏女史（ミヘ）

霞むみそらの景色につれて　けふり初めたる青柳の枝に
來啼くつばめの聲聞つれば　こぞきゝ鳥を待たれける哉

右評「景色につれ」及び結句が面白く有りません。

（ロ）　菊のや　つゆ子（オホサカ）

歸るといひし冬もさり、　のどけきはるもきさらぎに
馴染わすれで燕さへ　こぞの軒端に巣くひけり。
さりとてつれなき我夫よ、　國のためとは言ひながら
何とたよりも難波江に　身をつくしてぞ朽ち果てん。

右評　第三句「馴染」ハ一体の語法と不釣合です。

（ハ）　伊東けい子（イヨ）

こぞの燕か、月のもる　しづがのきばに馴れ〳〵て
友呼かはしとびかひて　ふる巣たづぬる其さまは。
朝な夕なの友とては　軒端に評るゝつばくらめ、
こぞのよしみを忘れずば　疾く歸り來てなぐさめよ。

右評　前二曲よりは優れて居ます。

（ニ）　奥野やす子（ヒロサカ）

こぞの家居は荒れはてゝ　おとなふ人は絶えしかど
時を違へぬもゝさくら　霞の中にさきにほふ
のどけき春にまたも來て　ふる巣つくらふつばくらめ

右評　なめらかですが趣向が平易に過ぎました。

（ホ）　まつの（イハシロ）

十萬億土にしの空、　さしていにゝし其後を
追ひてどこまでつばくらめ、　何れとづれも得てぞ來し。
軒端につげて聲しきり、　くちをし、悲し、解し得ず。

右評　意外な趣向、其意氣込は鋭くうけましたが、語が不熟です。「いにゝし」はむしろ「ゆきぬる」位になつた方が宜しいです。「どこまで」と「解し得ず」は些し一体の語法に對し疎野でした

（ヘ）　福富翠亭（トウケイ）

春もやゝ中ばをすぎて　我が園ハ千紫萬紅。
ふく風に花香をちらし、　ふる雨に池水みてり。
去年の秋去りにし燕　比よきになどて歸らぬ。
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　いゝゝゝゝゝゝゝゝ
去年うみし雛すこやかゝ　雌も雄もつゝがあらぬか。

今はいづこ影さへ空し　殘れるは唯軒端の巢。
去年の秋去りにし燕　我まつになぞて歸らぬ。

（ト）　伊東曉(イ二)

軒にとびかふつばくらめ　去年の古巢やたづぬらん。
汝が住みなれし巢ハ此處ぞ　とくかへりてよわが宿に。

（チ）　桂蒔小史(ケトイ)

波うてるしだり小柳、　雲なせる初花櫻。　歳々に送くるならひの歸へる雁、　まつをためしのつばくらめ、　けさより來にし聲すれば　古巢たづねてたどるゝ　こともやあらんと立ち出でゝ、　わふぐ軒端はいとゞしも　いぶせくそざみ小庭さへ　むぐらよもぎにとざゝれて、　訪ふ人かけもあらしのゝ　荒屋とかはりハてゝしに、　忘れもやらず一とせの　緣をたのみうれしげに　啼つゝかける擧見れば　うきよの事のしのばれて、　しばしながむるとりの道

以上三曲第三等賞

（リ）　三阪絹(サヒカ)

さびしき春もふかみぐさ、　匂ふ軒ばにつばくらめ、　つばくらめさへ今ハはや　こゝにかへりて來しものを、　などわがきみは花わらぬ　千里にながくれはします。

（ヌ）　松尾ひさ(サヒカ)

にほふ軒端にかへりきぬ、　契りあるわがつばくらめ、　むかし忘れぬ花とゝもに。　世の中の仇し人には似もやらで。

（ル）　雪の園主人(リダ)

花も柳も春雨に　眠る軒端をのぞきつゝ、　去年の古巢を尋ね〳〵て　訪ひ來る影ぞあつかしき。　おとなへる聲も床し　朝夕うきふたへぬ身なれば　人にしられねこゝろ盡しを　今日は語らんきけつばめ。
哀れはづかし一年に　老もさこそやまさりけん。　雪は頭につもり〳〵て　去年よりとけぬ我むねの　くるしさをしるやつばめ。　汝がゆく里は月と花とに　ながめつきせず常世なすとや　われをともなへ來る秋は。

（ヲ）　春江女史(サヒカ)

雁金かける北のはて　鋒とり守る吾君も　わざ爲し果てゝ歸るらん。　やよつばくらめ去年の巢の　あれにし跡も繕ろへよ。

住みにし人は絶えにて丶　降る春雨の音あはれ　めぐみ
忘れぬつばくらめ　昔ふにほふたち花の　櫓端にまたも
訪ふて來し　訪ふて來し
ふりにし軒端に物思ふ　花ちる春の夕まぐれ　薫をわけ
て歸り來し　またぬ昔しのつばくらめ。

以上四曲二等賞

雜纂

流行

前號に流行の夏ものと出しましたが、今更にくはしい處がわかりましたから引きくるめて載せます。　夏物は一体はこの雨勝ちのため市場に品薄いもの丶、しかし本月の中頃からは次第に上景氣に爲りさうです。　今その一二を言へば、

●呉服もの丶部

○西陣御めしちりめん
色合は薄柿色、薄鼠、草色（一名新駒色）、薄藤色鼠
柄合はせる縞のたぐひ。
價は上等九圓、中等七圓乃至八圓、下等六圓八九拾錢、

○西陣製
都唐ちりめん
色合及び柄行きは前同樣。
價は上等七圓五十錢、中等六圓五十錢、下等五圓七八十錢。

○西陣製
明石ちゞみ
色合及び柄行きは前同樣。
價　上等六圓五十錢、中等五圓五十錢、下等四圓。

○小紋ちりめん
色合は薄柿色小紋、薄利休鼠、又は新鼠。
小紋は行儀とほし、大小あられ、又ハ縞ぞめ
價は上等八圓五十錢、中等七圓、下等六圓五十錢。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●木棉の部

○中形ちゞみ

色合は藍ねづみ、高砂ぞめ、色入り高砂ぞめ、薄色小紋がたの類。

價は上等一圓二十錢、中等八九十錢、下等七十錢。

○チヽルちゞみ

色合は薄柿色、白茶地。

柄合ひは横竪、また其他。

價ハ上等九十錢、中等六十錢、下等五十錢、

○紅梅わり四ッ入

色合ひ及び柄行きは鼠地、薄柿色縞がすり、紺地、白地縞がすり入。

價上等三圓十錢、中等二圓八十錢、下等二圓五十錢

●外國品の部

○佛國製

水波琥珀婦人帶地

色合は白茶、黑、藍鉄の類

右の廣帶一筋金十五圓

○英國製

縞セル單物地

變り柄、大小縞るゐ

右の單物一枚金四圓から七圓まで

○英國製

疋田小紋形類

色合ひは薄鼠、濃鼠

右の單物一枚六圓三十錢

○獨逸製

本ふらねる

右の單物一枚二圓五十錢から三圓まで。

右のとほりで本年の流行は大抵盡くしました。此直段で通壹丁目の白木屋で賣り、そして品も揃ッて居ます。御都合によつては駿河町の越後屋でも宜しいです。

何にせよ本年の夏物を占領する色は重に薄柿色で、是は去年から些しづゝ現れたのが本年に至ッて猶はなはだしく爲るのです。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

瘭疽の豫防　裁縫は女子に取つて必要な業務です。が此裁縫に一の恐ろしい禍が結び着いてゐます。　必要な業務だけに害と認むる箇條は猶豫なく取除かれなければなりません。
　諸孃の裁縫をなさるとき誤つて針の尖で指の腹等を刺す事が度々ありましやう。　これです。　こんなことは些細だとし、諸孃は少しも氣にかけますまい。が、それが度々重なると、終には一の恐ろしい病を醸すことがあるです。點滴も能く岩を穿つとはこれでしやう。　この恐しい病　即ち瘭疽を防ぐには石炭酸が一番手輕です。　常々石炭酸の瓶を座右に置き、針で刺した都度早く其局部の出血を止め、そして彼の瓶の中へ差し入れるのです。　かうさへすれば決して瘭疽の起る患はありません。　今迄瘭疽を多く婦人が患ひてゐたのは、その原因を知らず、從つて豫防法を行なはなかつたからでしやう。

家相方位の說

家相といつて支那より傳來し、をさ〱日本にもこれに熟練した人が出來ましたが今日に至つては皮相の理學者に壓倒されてこれを信ずるものも無ければまた奉ずるものも無くなりました。　元より家相學といつて其說く所の箇條に不道理なる所もありますが、また中には尤も道理のある、天晴れ適中する論もあります。　中るも八卦中らぬも八卦といふものゝまことと道理はどこまでも道理です。　家相の昔しの說の一概に擯斥することの出來ぬといふことは十號以前のいらつめに於て竹中醫學士もいはれました。　今日に至つても元より我々は同說です。　然るに此頃坪井二郎氏はある所で前云ッた通りの說を述べられました。　其大要を摘んで更に吾々の意見を加へて見ましやう
　家相秘傳集に中庭などに樹木水溜等を設くると大に凶しとあり、又宅經に中庭に水が溜まれは病を起すとあり、その他諸書にも同じやうなことがある、これがなか〱道理のあることで、既に中庭といへば必ず人の身の近くにあること、それに濕氣の本となるべきものがあれば病を起すのは當然の事この說は實說です。　リウマチス、脚氣などの病は多く此邊から起ります。
　又おなじ書物に厠はかげに置くをよしとし井戸などの側に置くのは甚だわるいとありますがこれも近頃人々が言ひあきるほど衛生會などで言ひ盡したもので、厠が井戸などの側にあれば自然其きたない汁が井戸の中に染み込み混り込み、人は其水を知らずに飲み遂にいつか〱或は傳染病の蔓延を招

くゐどのことがあります。　近頃は家屋制限が出來、新築の便所は瀬戸燒の瓶で作り其上檢査をも經る定めにもなりましたから大きに宜しいですが、なほ人が氣のつかぬのは便所と日あたりの惡い所へ置くことゝです。穢い話しですが、南向きとか東向とか乃至西向とか兎に角日あたりの宜い處に雪隱を置けば日に蒸されて沸き立ち自然に惡い瓦斯がたち、夫が始終人の鼻に入り、健康を害します。それのみか日に暖たまれば自然に蛆虫の發育をはげまし、愈々不潔の本となります。昔の家相に、それゆゑ、便所をそこそこへ置くなど差圖したのも決して無理ではありません。

又むかしの家相の説に吸込を惡いといつてありますが、これはきたない水を家から遠ざけることをいつたので不潔物が病毒の發生を媒介する者といふことは今日の衛生家が認めてゐるところです。

又家相大全といふ書物に樹が家を貫いて家根の上に出て居てはえてゐるのは惡るいと説いてありますがこれも余り樹に近づき過ぎて却つて濕氣を呼ぶのもゑわるいといつたのです。

和漢三才圖繪に吉宅凶宅のことが載せてありまそ。　これによれば後ろに山がある家は吉三方に平地を扣へた家は吉、後に山、前に山右に水、左に砂場を扣へた家は吉、後に林と墓場を扣へた家は凶、後に水横に林と水とを扣へた家は凶後ろ岡前に寺を扣へた家は凶などゝありますがこれらもまた謂れがあることゝです。　右があらましですがそれもゑ一概に占の家相の説も擯斥は出來ません。

花顔玉手秘事(其三)

手の赤いのはあまり見良くもないもので赤くふとつてぶよぶよとれしたら水でも出さうなのは得てれ三どんにあるところです。　いらつめ方はまづたしなみに赤い手をばどうかして奇麗になされたいものがぞ。が、そこで手の養生がなかなか六ケ敷いです。　度々いふ通りですがこの手をば洗ふには微溫湯に限ります。　たゞふくれた手に水へひたせば自然おますます水腫れになるものですからいくら洗ふのがいゝかといつて烏の行水見た樣に浸つてばかりゐてはいけません。冷水は常に用ゐると手の美を減します。　石鹼を澤山用ゐるのは手をかへつて麗美にしません。　適宜に用ゐるに限りま

す。　石鹸は蜜、リスリン、巴旦杏、レモン、薔薇などの製造品で上等なのに限ります。　石鹸を用ゐるときには注意して極めて清浄な水をつかふがよろしいです。　石鹸で洗ひ終はつたらかわいた手拭でおとをはげしく拭ふにこした事はありません。　それで充分に濕氣を拭ひ去るが肝要です。

火にあたるのは手のきめを荒びさせます。　本當をいふと冬は山羊の皮のきつちりした手袋を用ゐるがよろしいです。

コロール石灰五六グレインを三合の微温湯に解かしそれで手を洗ふのは手の色を甚だ速かにうるはしくします。　これは硼砂を解かしたのと大きな差ひはありません。　これを用ゐると例のお三どんそのまゝの赤味が去る、そしてしみなども拭つたやうにとれます。　洗ひ方はちと面倒です。　右の湯の中へ十分乃至十五分間黙つて手を浸たし、その後手を揉んで洗ひやがて拭ふので、これを毎日朝夕の二度行なふのです。

こゝに非常に驚くべき白色薬があります。　もとより一時を彌縫するだけの薬で永持ちはしませんが、然し其成効の速かなのは誠に舌を捲くほどです。　それは外でもなく西洋八百屋の見世に於ていらつめ方が御覧になるもので、例の香氣の郁々とした黄ろい金色の木の實でそ。　あまり廉くもありませんが、一つ買つて用ゐれば兎に角一日分の化粧品には充分です。　これは化粧法の中の最も必要なことゆゑ決して等閑にしてはいけません。　即ちレモンです。　レモンを庖刀を以て眞甲二つに切り切り口をぴつたり手なり顔なりへあて暫くして離し、汁を搾り石鹸の樣に用ゐる、かうすると實に不思議なやうに手や顔の色か見る／＼白く、透き通るやうになります。　これは鹽風に黒んだ膚もすぐやはり此方で白ろくなります。　言はゞ濱の御奉行樣の歌を想ひ出すばかりです。　これまでのいらつめによくいく度も耳にたこが入るほどレモンの効用を説いたのもこのゆゑです　（つゞく）

數學

第四十七號解義　綠梅子

●算術

(1) 或素數で其素數の十倍以下の十の諸倍數割ったときは、互ひに違った殘數を得るものです——此理は略します。

7の場合は即下の通りです。

10=(七ノ倍數)+3,　40=(七ノ倍數)+5,

20=(七ノ倍數)+6,　50=(七ノ倍數)+1,

30=(七ノ倍數)+2,　60=(七ノ倍數)+4.

で、50×30={(七ノ倍數)+1}×{(七ノ倍數)+2}

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

$=(七ノ倍數)\times(七ノ倍數)+(七ノ倍數)\times1+$

$(七ノ倍數)\times2+1\times2=(七ノ倍數)+1\times2.$

又 $50\times30\times10=\{(七ノ倍數)+1\times2\}\times\{(七ノ倍數)+3\}$

$=(七ノ倍數)+1\times2\times3.$

右の運算を施して行ッたなら終には次の式の樣になり升。

$50\times30\times10\times60\times40\times20=(七ノ倍數)+1\times2\times3\times4\times5\times6$

此式より $50\times30\times10\times60\times40\times20-1\times2\times3\times4\times5\times6$ は七の倍數であるとが知れました。今試ニ此數の性質を分解すれば。――

$50\times30\times10\times60\times40\times20-1\times2\times3\times4\times5\times6=10\times20\times30\times40\times50\times60-1\times2\times3\times4\times5\times6=1\times10\times2\times10\times3\times10\times4\times10\times5\times10\times6\times10-1\times2\times3\times4\times5\times6=1\times2\times3\times4\times5\times6\times10\times10\times10\times10\times10\times10-1\times2\times3\times4\times5\times6=1\times2\times3\times4\times5\times6\times(1000000-1)=1\times2\times3\times4\times5\times6\times999999.$

右の式で見るに $1\times2\times3\times4\times5\times6$ と 999999 の何れかが七の倍數でなければならぬ。けれど、前式ハ七の倍數でない諸數の相乘積ですから七で割れないのハ無論です。從ッて 999999 は七の倍數でなければなりません。

右の理と推擴める時は 999999999 ハ十一の倍數で、999999999999999 は十九の倍數となります。

(2)答十二圓。(解)一年に衣服一枚と三十六圓ですから七箇月では $12:7::36:x$, $x=21$ 圓と衣服の $12:7::1:x$, $x=\frac{7}{12}$ 枚を與へて宜しいです。が、衣服 $\frac{7}{12}$ 枚の變りに一枚を與へたので21圓與へる筈の給金が十六圓に減じたのです。言ひ換へれば衣服 $1-\frac{7}{12}=\frac{5}{12}$ 枚の價が $21-16=5$ 圓なのです。それ故衣服の價ハ $5\times\frac{1}{\frac{5}{12}}=12$ 圓です

(3)答七分の六。(解)若干人で成すと其三分の一を減らして成すでは其業が減じなければなりません。其比は $\frac{1-\frac{1}{3}}{1}=\frac{2}{3}$ です。又若干日働くと其七分の二を增して働くでは其業が增さなければなりません。其比ハ $\frac{1+\frac{2}{7}}{1}=\frac{9}{7}$ です。ですから之れを1に乘じて答 $1\times\frac{2}{3}\times\frac{9}{7}=\frac{6}{7}$ を得ます。

(4)答三斗。(解)利益を得て賣ッた價の總計は $80\times30\times(1+\frac{1}{10})=2640$ 錢です。これを一升の賣價で割れば賣ッた酒の量が出ます即ち $2640\div24=110$ 升。この內からもと有ッた酒の量を引去れば混ぜた淸水の量 $110-80=30$ 升即ち三斗を得ます。

●代數

(1) (解) $(x-2)(x-3)(x-4)(x-5)-99=(x-2)(x-5)(x-3)(x-4)-99=(x^2-7x+10)(x^2-7x+12)-99=\{(x^2-7x+10)^2+2(x^2-7x+10)+1-100=\{(x^2-7x+10)+1\}^2-100=(x^2-7x+11)^2-10^2=\{(x^2-7x+11)+10\}\{(x^2-7x+11)-10\}=(x^2-7x+21)(x^2-7x+1)$.

(2) (解) $b^2-\{5ab-(a-3b)(3a-b)-a(a-b)\}=b^2-5ab+ab-3b^2-3a^2+9ab+a^2-ab=-2b^2+4ab-2a^2=-2(b-a)^2$ 此の末式の$(b-a)^2$ は a b の値が何であつても必ず正量となる、正量に-2を乘ずれば必ず負量となるので、本式は a b ノ値の如何に係らず負量となるのです。

右皆答岡田榮吉

一寸一言諸孃に…………　綠梅子

いらつめ第四十七號を御覽なされた御方は御存じでせう。「第四問の4を剩しは2を剩しの誤りでした」。正誤があつてハ私の解も變換なければなりません。それ故一寸……大躰は違ひ有ません。が、たゞ0044 88の換りに2266を用ゐねばならぬのです。從ッて答も違ッて來ます。即ち五百二十二或は五百六十六です。

質問は充分なされては如何です？　私も充分御答致しますから………

算術　岡田榮吉

(1) 二枚の紙で張つた袋に滿たした茶の價が一圓五十錢ならば三枚の紙で張つて袋に滿たした茶の價は何程でしよう

宇佐美かず子

(2) 除法と用ゐないで或數を百二十五除した答を簡便に得る法幷に其理

(3) 142857143 といふ數に九位以下の任意數を乘じて出來た積に七を乘ずれば必ず得數の終に掛けた數が顯はれます。其理は？

(4) 7より大きな素數で一を割ッて出來た循環小數ハ偶數位で其數を眞中から分けて加へれば連九數となる（假令ば7で一を割れば $.\dot{1}4285\dot{7}$ 此を眞中から分けて加へれば $142+857=999$）其理如何？

(5) 次の三題を簡便に運算し併せて其理を詳言せよ

(a) 百二十七の自乘數から百二十三の自乘數を引いた殘は何程？

(b) 四十九の自乘數は？

(c) 五十三に四十七を乘せよ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

代數　　岡田榮吉

(1) x^7-x は x の値の如何に論なく恒に四十二を以て除り盡し得ることを證明せよ

宇佐美かず子

(2)

$$\frac{1}{1-\frac{1}{1+\frac{1}{x}}}-\frac{\frac{3x}{2}+\frac{x-1}{3}}{\frac{13}{6}(x+1)-\frac{x}{3}-2\frac{1}{2}}$$

上式を最簡式に化せ。

(3) 百を二個の數に分けて出來た兩つの數の自乘の差が千になるには何う分解したら宜しいでせう

幾何　　岡田榮吉

(1) こゝに三つの互ひに平行する直線があります。この三つの直線の各の上に各々一角點づゝ在るやうに正三角形を造るにはどうします？

通信問答

中山時子さまへ（一）女子で演說などするのは其熱心は寔に角あまり淑徳を完ふするといふ譯には行きません（二）陰月陰史とは誰の事か知りません（三）何も貧人に多く美女が生れ富家に多く醜女が生れると限った事もありません。

松田都宇女さまへ（一）蚤を逐ける法はもすこし暑くなってから載せます（二）イラズといふ油の事は知りません（三）最佳貝の歯みがきは東京資生堂の歯磨石鹼です（四）毛髮を生す藥、及縮髮を直す藥は廿八號以前に幾度も出しました（五）昆布のやうな海草類を常に食べるのは大に白髮の豫防になります（六）白髮ぞめ藥は知りません（七）水白粉の製法は次號に出します（七）ハンドコロンの處方はいらつめ第廿四號にあります。

むらさまへ（一）水晶亭氏の名は江見、春亭九花氏のは丸岡久之助、霞亭主人のは渡邊、x y z 氏のはやはり丸岡久之助、槐堂仙史のは安川孝吾、麻渓居士のは北川、牛牧居士のは岡野。

齋藤はら子さまへ（一）硼砂を解かした水で顏を洗っても宜しいです。白色の効は矢張有ります。成効の日子は平均三ヶ月以上です（二）身体の悪血を去るにはサルサ根を内服なさい。サルサ根内服の法方は前〻のいらつめに出て居ました（三）世に傳ふる記憶術などは得て多く死唐なものです（四）レモン液の効能、是は本號の雜纂内花顏玉手箱事の處を御覽なさい（五）厥小便をする癖を改める法はいくらも有りますが確信を置ける法とはまだ知りません（六）顏の赤いのは血の故で之を直す法は前〻のいらつめに出て居ました。

小林いし子さまへ　前々のいらつめに出したソバカスを去る法、その用分の軟水を入れずに用ゐては顏に藥りが強く浸みて痛みます。軟水をば入れ故入れた

が宜しいです。

湯本うめ子さまへ（一）硼砂は藥屋で容易に賣ります（二）ハンドコロンは誰にも無害です（三）襟の雲の價は一瓶六錢です（四）手のまめを去る法は前〻のいらつめに有りました。

神崎ない子さまへ　天刑病は遺傳するものです。

パイン女史　言文一致小說の中で最秀逸なのは初戀、浮雲、武藏野などです（三）ナショナル讀本三四邊の學力でよみ得る英文小說はリツトルウーマン、リツトンのマルトラバースなどです（三）雲峯子の本名は磯貝由太郎

梅花女史さまへ　小說御熱心さの事折角ゆゑ御助言もいたしましやうがさてこれに付き何なり御問ひ下されなくては御答へも出來ません。右御挨拶まで此欄を借りて……美妙齋

田舍娘さま　カルトス泉鹽は產後決して害は有りません。

笹川はる子さまへ　（一）東京の目下の四十餘りの婦人の髮は矢張り丸髷ですが根のすこし上つた方です（二）十六七の淑女の羽織の色はやはり水淺黃です（三）つれ〳〵草は廿五錢位激氏は四五川伊勢二十錢位（四）山羊が鰻に化けるさは虛說です。

志田伊和さまへ（一）英語の雜誌で文學上の面白い事の載つて居るのはハーパースモンスリー、スクリブナースマガジン、リツピンコツーマガジンなどです。

不如子さまへ（一）顏を白くする洗ひ藥の硼砂と水一升ならば同じ比例で小匕に五杯ぐらゐ入れるのです（二）サルサ根は全く無害です。　用ゐるのは少くて二週間以上です（三）齒さ口中を嗽ぐ硼砂水は水に硼砂を適宜に交ぜたので宜しいのです。口にあまり強く感じぬほどの味なら宜しいです。　一週間以內は同じ瓶に溜めて置いても差支ありません（四）呼吸に臭氣のあるのは多く口中の掃除がわるい故で、それ故口中をよく掃除し怠らず含嗽水で口をすゝげば直ります（五）爪際の皮のむける處にはポマドンヌール又はリスリンを塗るが宜しいです

諸姉へ　　　　大西たつ子

讀賣新聞が事々しく書き立てたる女學校醜聞事件も幸に無根に近しさの證明立ちたるやうにて御同前に我々女學生に取りては今後の就學も叶ひ父兄に對しても面目無き處なく大に安堵仕り候。　さりながら昔の諺に事は言出すさやら申し、根も無き事にても宣言したるが却つて原因さなり思はぬ結果を起し候やうのともよくこれあり候。　現にいらつめ方も草雙紙類を見て御承知の事なるべく、乙の女が甲の男さわけ有るやうに言ひふらされて扨實際はさる事毫一点も無かりしがやがて此二人相逢ひし事ありしに料らず其晝日の浮評を語り出で、果は如何なる天覺のさそひにや、其浮評を實行するか如き始末さなりしさ申す事も有之候。是は極論なる例ながら世の中の事は兎角そのやうなものにて意外に出る事多くあり候。　從來は非道さも聞ねざりし女學生の思想も一はこゝに誹毀者の口吻より世間男子間に喚起せし以上は或はこの例に引きし不德男女の二の舞を爲すものあるやも料られざるかさ女子心より淺はかさは存ぜず候へども愚考仕り候。　皆さま方は何れも學校にて然るべき教育を受けたまふ方々なれば さる事の有る無しを今こゝに申すだけ失禮には候へどもわれ〳〵女性の体面を全ふする處さ思へばさすがに哀情忍びがたく候まゝ拙き筆にまはらぬ處を運び候。　妾が敬愛するいらつめ記者先生何さぞ拙文ながら御登載願上候。　百花咲句ふ御雜誌の中にかゝる繰言めきたる物を出すハ誠に御氣もじさまには存じへとも返す〳〵心中御察被下度ひう〳〵く

奇怪なる手簡

神田うめ女

妾は神田に居りますが近頃突然友人の許より封書の一書狀を受けました。學校の出掛にてそのまゝ懐中いたし學校に行き、知らぬをさて皆さま御さもたちの方の前にて開き見ました處思ひがけぬ見るも忌はしい艶書さ言ふもので厶いました。このやうなをかしな事を申上げるのは誠に相濟まぬ事で厶いますが、腹も立ち無念にも厶りましてそれ故如何な事を申述べます。其艶書はある有名家の名をかたりましたので、封の皮には妾の友人の名が有りまして中には其有名家の御名を記して厶いました。その文言は申すまでも無く甚なまめいた物で、何にいたせ妾の名や朋友を御存じの方のいたづらさしか思へませんが、誰がいたした事か思出すさ妾も戀しくなりました。妾は國を出る時にも堅く兩親にも誓つて浮た心を起すまい、浮いた事を見聞しまいさ魂を緊めて參つた身分、決して汚らはしい事を耳にしたくも思ひませんのに、何を怨みが有るの、か何を人をそんな浮氣なものさ御覽なされてか、それが殘念でたまりません。御朋友の前でわれ知らず開きました手紙ゆゑさア寄つてたかつて皆さまに笑はれまして身の置き處も厶いませんでした。其名を記された方は有名な先生で品行方正さは皆知つて居る方、そして妾が公然その方さ存じても居ぬこさ、どういたしても僞書のいたづらさしか思へません。然る處不思議な事にはその妾にまゐりし手紙さ同じやうなる手紙を同級の何某さいふ令孃も受取りましたさうで、そして其手紙も亦わたくしのさ同じ、見覺の有る先生の御書さは全く違ひますゆゑ、全く僞書さわかりやがて大笑になりましたが惡戯を爲るも事によるもので厶います。ぶしつけな御はなしながら實事だけを御知らせいたします。世間のいらつめ方御注意あそばしませ。このやうな事から飛んだ浮名をかうむるさはかれて妾も母から聞いた事も厶いましたが、皆さまもよく／＼御心なさいませんさ飛んだ一生の瑕を受けます。かしく。

(一)日本國海面の境界は何によつて定め候ふや
(二)いろは譬の元始は何年頃にして何人の作りしものなるや。
(三)縮羅紗の襟垢を去る法
(四)正月門松を樹てる風習の起原……以上　山縣小太郎
(五)白拍手の起原
(六)日本で第一に出した新聞紙の名……以上　神崎えい子
(七)金銀を鑑定する便法
(八)絹フラチルの色の落ちるのを防ぐ法……以上　佐野政治
(九)サルチル酸の眞否鑑別法……加登桂子
(十)編物に關しての眞書籍の名出版處定價及著者
(十一)栽縫に關する前同斷
(十二)近來子宮病の者昔時より多しさいふが如何なるものなるや其理由を伺ひたく候……以上　志田いと

右どなたでも解答は出來ます。　貴答本月廿日かぎり

餘興

新題

(一)夜に雨が積りましたが何んでしやう
(二)人が知らず／＼食ひますけれど其味をしらず又盡くることと

容易に見えませんが何んでしやう

（三）体が柔かで一つの穴があります人が指先きでくぢると辛い
粉を出しますそのはなんです

（四）鳥ありふかわを冠る此鳥囀ずれば人をして悦ばしむとれ何
んな鳥でしやう……………右四題　山縣小太郎

（五）足のないひつじを箱に入れたら底をぶちぬきました

解答者心得　皆答者にはいらつめ二部、四題解答者には
一部○解答紙は第五十號に附錄として入れます○其號の解答
紙に認めてない物は沒書○本號解答御送付は五月五日限

注意　第四十五號新題の解答用紙を附錄としましたから
來る廿五日迄に御送付を願ひます

社告

本號には文藝美術欄に掲載種目が多かッたゝめ仕方なく
裁縫獨學び其他家政及び薔の花を拔きましたが、次號には
悉皆載せます。猶それでも有り餘ッた文藝が澤山に有ふ
ますそれは次號へ讓りました

西洋水おしろい
肉色
薄さくら
定價は　小瓶五錢　大瓶八錢

此薄さくら肉色水おしろいは弊舖の新發明にして舶來の原品
と雖どもとさ〳〵一歩を讓るほどの良品なる上其効能は顯著
しく常に御使用なさるに第一御顏面の膚理を精密にし血色を
爽快にし優美なる光澤をいださせ極て衛生上に有効の良品な
れば御試驗の上澤山御用向の程伏て奉希候

西洋白粉
肉白二色
玉椿
定價曲物入　一個　四錢

此玉椿西洋おしろいの原品は佛國博士某氏數十年研究を
試し元質の良品へさま〴〵なる花の香を混じ精製したれば
普通の鉛製麁惡の白粉に異り最も衛生優美一用兩得の佳品と
も言べき新發明のおしろいなれば御裝用の上他に類のなき薰

功を知り玉はゞ陸續御購求あらん事を冀ふ

次に歯磨は左の品々ありていづれも調製に撰擇を加へたるものなれば其効いちじるしく平常御用ゐになれば歯の琺瑯質を減殺することなく雪の如く白くなさしめ殊に口熱を去り歯に關するいろ〳〵の病を退け又口中の悪臭を除きしかのみならず郁々たる薫香を保たしむる等の良効ある歯磨なれば續々御求めあらん事を願ふ

匂袋御はみがき　麝香入
花の園　日本々紅及麝香入
紅梅香　仝上
雪の梅　寶丹入

製造本舗
外神田旅籠町二丁目二番地
伊勢屋惣兵衛

小名木川綿布會社織物販賣

同社ハ府下屈指ノ實業家ガ七拾萬圓ノ資本ヲ投シ團結組織シタルモノニシテ織物機械ヲ英國「マンチエスター」ニ購入シ一大工場ヲ府下小名木川ニ建築セシハ既ニ三年前ニアリ而シテ今ヤ專ラ綿布織物ノ製造ニ從事ス抑モ該發起者諸氏ノ目的ハ一ハ外國輸入品ヲ防キ一ハ其事業ノ進歩ト共ニ製品ノ販路ヲ海外ニ擴伸スベキノ計畫ニシテ我ガ本邦工業發達ノ萬一ヲ補佐シ併テ商業ノ繁榮ヲ將來ニ期スルノ精神ニ外ナラス左レハ其製造品モ前ノ目的ニ反カズ第一原料精撰、第二機杼緻密、第三染色不變、第四巾長有餘、第五着用久シキニ耐フル等之ヲ要スルニ仝社織物ハ外國輸入品ニ比シ價ハ遙ニ下位ニ在ルモ品質ニ至テハ一歩モ讓ル所ナシ蓋我カ本邦内ニ於テ機械ヲ以テ斯ル日用必需ノ織物ヲ製造スル會社ハ當今小名木川綿布會社ヲ措キテ他ニ求ル所非ルベシ然レ𪜈其創立ノ日尚ホ淺ク隨テ製品未ダ全般ノ需要ニ充ルニ足ラスト雖𪜈増設ノ機械据付モ日ナラスシテ竣工ヲ告ゲ製品今ニ倍從セシ依テ普ク仝社織物ノ實利アルヲ世上ニ示シ其好評ヲ博スルノ日蓋遠キニアラザルベシ茲ニ弊店特ニ仝社織物ノ販賣ヲ約シ極メテ薄利ヲ以テ廣ク其賣捌キニ從事セントス依テ二三物品ノ名稱ヲ記スコ左ノ如シ

一唐棧縞
一綿フランネル
一天竺木綿
一綾小倉
一白縞縮
一新柄浴衣地
右ノ外三巾物風呂敷前掛等各種アリ又卸賣モ仕候

前述ノ通リ誠心實意ヲ以テ專ラ仝社織物ヲ販賣仕候間偏ニ御愛顧アランコトヲ希望仕候且ツ右ノ趣御懇意ノ御方々ヘモ御吹聽ノ程願上候

東京日本橋區通リ三丁目四番地
布屋敬白

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY